

鉄道図書館蔵書

序

和歌は神をおそれ鬼をやらひ人の心を和らげ
夫婦の中をもやはらげ猛き武士の心をも慰むる
ものなりとかや小倉の百人一首をもてなし初めしより侍はうたの
ちからをもてしらぬ国もなくこの道に
引れんと発ろふべくもあれど皇御国の
子等の人の字ふさき心操のうるはしきを
こそ古へも夷も列婦の世と発かるれ

そもやいろは歌をもろ〳〵の筆より記し今
成れる孔雀文庫と号ける儀式などもかく
にこそ増補教章大和詞と題しそは
女わらべこと〴〵に浪かいと浅き拙き
物にこそあれ花のかげよりも見るべきいろ
よりの秋をもたのしみ給へかし

一琴亭楊
亂信









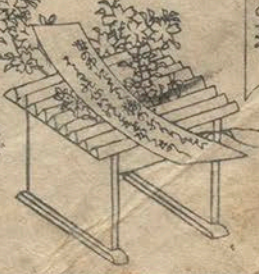
ロノブ



和歌







名代經册紙

白川関


香道之縁
活け花


茶の湯
双陸



花結



機織



縫針



衣服裁ときの紙鴛



線焼葬の事

天福皆来 地福円満 一切諸願 皆令満足

○男の衣裳を裁ざる日
春 己巳の日 庚辛の日いむべし
夏 甲申の日
秋 丙丁の日
冬 戊己の日

○女の衣裳を裁ざる日
甲申の日

○女の凡のさうりある時生女の衣裳をたつべからず

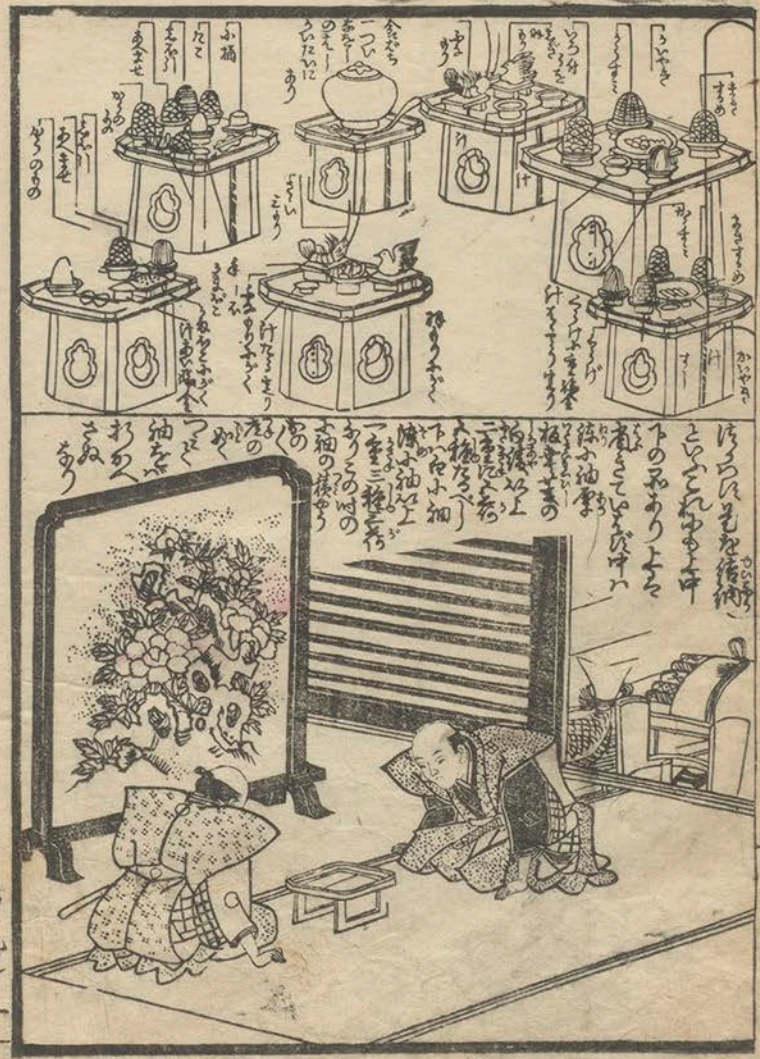
○産衣染いろの事
緑色 甲乙の生れい
赤色 戊己の生れい
白色 庚辛の生れい
青色 丙丁の生れい

右いづれも大吉相あり かならず用ゆべし



婚禮式法





女中嘆き節歌



世の中に
恥ふ
有る
くるくる
何よつてそ
なるものぞ
うん

それをんなハ苦悩とも
焼焼酷役して四季の数をまわる
御ー 焼焼とハ形もんもんも
うるおうるおうるおうり粘焼とハ
反舌共のふ古く残りそうも
そもむしてまくらふる ありこの
四字のたー おくなきをんなの
たとへこうかくもちいのみといふ
くるくるとまわるぎるまり
ようくく嘆もべー

(一) 色ひふ油のくす
嫁入の折むこのかさうりもひふ袖とくふ油さけさうをつ
ぬりありこのとゝこのふそをもちうとあうをあさまおいて
掃つけ後につむあり

(二) 白髪の手
よあへの折たみをうくに髪の洞くをぬつ、合せるやうに
おくあり あの毛ふ白髪あるべー 反風の除墨高額う
有るの後をべもちやべー べふくく白き後のうべー
ろくくく 抜ちんのいろもなさをもちひ洗土着のかたも
白ふ油長ハ向かくびくたべー

(三) 洞房かざりの手
同ふをゆんきにおろきろをもちゆることあい種さより
波室に出るつりて後ろいろにも除ぬこのさを着して
そろさをそくとむとあり

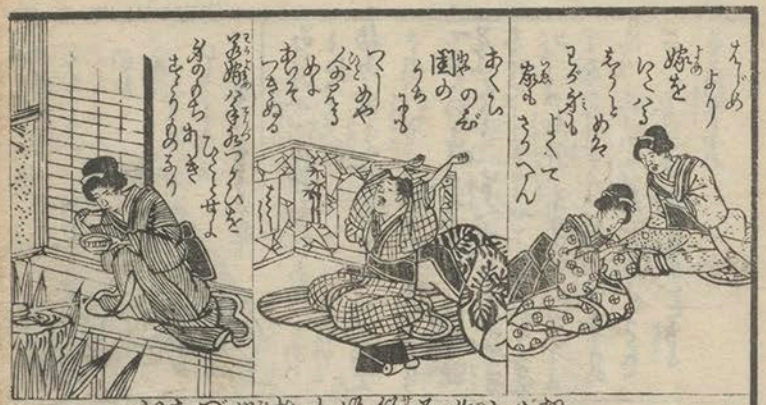
(四) 洞房かざりの手
まず座のくへろ金銀錦繍の着尽衣の着重
重種被子こう登桃子提もあり さくおとこの衣桁ふそ
もろくの衣指をうけ 名ー 見揃もろの数とこのうに
かさるあり 書把の手桐もろひだるおとかざるあり 衣桁
黒なる物なによろくことこのたる右にかざるあり よあの
衣桁にその数七ら同にそとりかくくん 七ら同にの
まくとりかくくこうけべーその衣被をもろふ
そくびり時里ふようくく兎むー

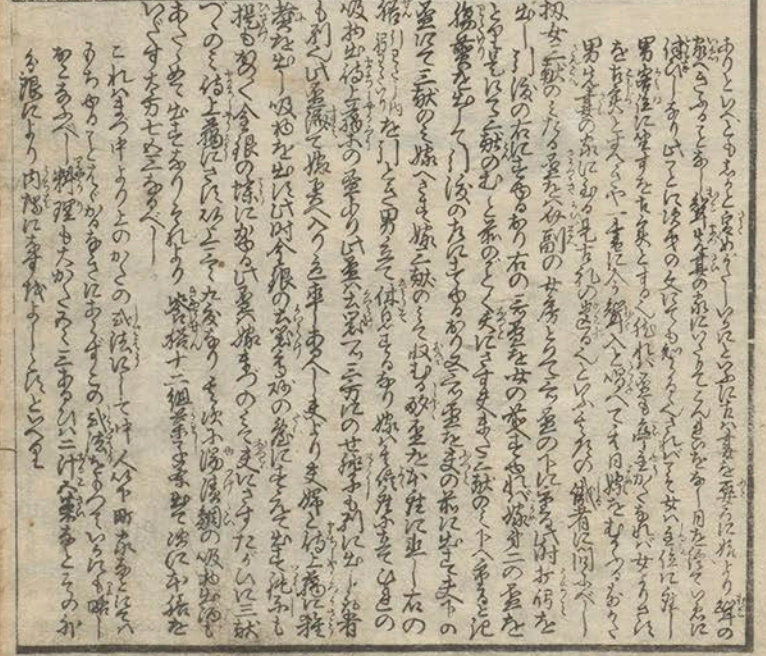

○勝手の棚飾の事
一上の棚へ
一中の棚へ
一下の棚へ
次ハ毎朝

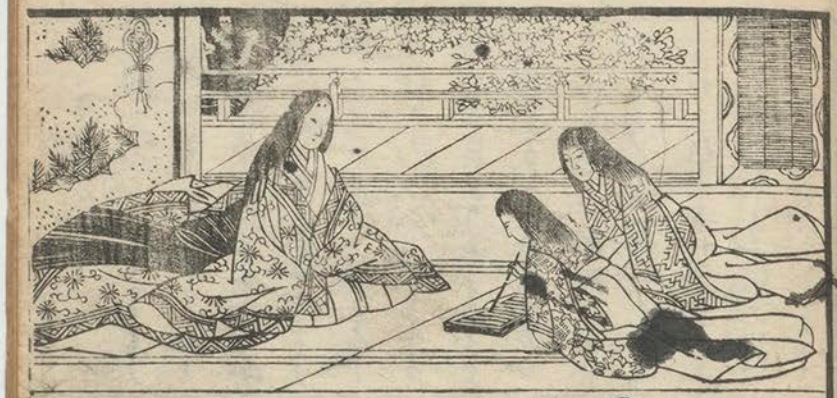












女大學

一ツ女子の某を

二ツ他人

三ツ家へ行さ。男姑ふ

四ツ結ることのまゝだ。



化粧こそ
うるはく
髪も
かたちも
いふもさらなり
そびをこそ

あの如女例の夜歌舞あやつりとりどりくるまにいと
由あるもさまざまなるをもそろひぬべ
されば我ぎやう取のをしへのまゝ
てかくのごとくをあげつゝ容貌
そふくるも一生人ふもせれ学芸
をのべ一さをゆ ひとにまさ
けくるも心柳 なをざ 人のそ
つまをうけせうりたちぐくもり
あり 其のうへ 夫
ゆへて 夫を性 もの
其れあれ



おほよそ人のこゝろ
そのさまざまなる中
にもしの書わざうん万ふ
しぎなるものなるべし
あるひとゝやがて年
とをもるそ人のおもふ
わざなるべきうたゝ
男女ともにあるふしぎ
にふく男も雅俗もふ
たりそれぐくみ色男すき
ものなりひし女のすみぞふ
なるとろ〳〵〳〵上代の
風の雅くをまなぶんち

男ふよりこと。親乃
ことへゆるせり
すべく。父母兄弟
〳〵恐〳〵そぞろ
おもべ。夫のあ〳〵
りく。おもひそ

おくのうらと上古の
ことと文字もかくく縄をむ
すびくおくらをなせふ
蔡倫といふ人多の是おと
ろんで文字を作りしと
いつて◎わづの数そくらの文
字をもつて古伝大治造
ことうふ今のふ行仮名う
又をのち平かんなろ仏法
大師天竺の伊呂波うた
四十七字を造りてよりく
いよ〳〵今のいろはありい
うへの二そのあとりて
あなふそめとかせり

夫ふ疎まれ。又ろ
男の偏心
なまど。怪ぐく
おりひ。男を恨
恥を申ふくりて。
狂ふも追出され



私を睡す。女の父母。わが前なさ事を聞ゞて。男夫の恋さとのく思ふ。誤なり。是これ女の親の義へ

なれ有り一女ろ言ろも心のまゝなれをよしとゞめ。心緒美なれ女ろん蛍く。服ろく足出

女縁状

一ツとして親の気に背くまじき事
一女子として男うち強くすまじき事
一下人にても人を打つまじき事
一うち人にても人を殺すまじき事
一下人も人のやうに人にてあるまじき事
右の条々

一人うちおろかにそれをもつべからず
もつべくば女人あるまじ
すべて女は三従の礼をもつて
その従ふをとうとぶべし



一人の家ふりてよき色のあるうりて出居子べからず
一人の婿するに人にわづらはされそうなものと思ふべし
一人をうちのやうに近づべし
一人のをとうとをあがまじわるをもちゐべし

一人と思ふ。玄
素あるふおいひ
さだくに結て。人よ
先ぶち人と打ち嫉
多死と誇て。人を
誇と笑ひ。我ひとふ
猶さがなる時女の
名ふなどくるり。女わ
あぐわざ志ぶひて。
臭佐ふ情ゆうく
静なるとうとき
一女子の権より。

男女ともに列をなして
老も若きも狂乱して
おどりあかすべし
らんどう。市人への徒り。
男女ともに席を同じく
ゆかず。衣裳をもおのづ

やうに死の体となりゐるべし
一なる事はよく当なる雑
さ事ハやうとうびし
一事のごとくやうなるべし
事の事ハみより最の事の
ろうとうとおくうし
ぐ
一ねのおさ参ぶゐびえ
えずもおさしくり
いべゐび勿倫人ごぶ
うずそとうぐしべ
一かくるいよくなべ
参列のおい伝もうべび
神仏のふぎをいひやし

人ごとうてまうへ
やうふとうていぶうを
うず人妖とのひ祖を
よく事おうとのう
一神仏いうもべしを
けげずうずうも学べ
一そ月おみ負きを
さそべしなの
ふひて志を先べび
一女の参拝おいを
うやえおうべびたぐ
何事も学ぶ参うべ
がけ情こうべし
おわりをもうり

毎よ垂ぢ。ぼる所
うる浴せぐ。物を
まりわ千事も。
ようをへおう
せぢ。夜もとさる
わごぢ灯をとりて



りぐ爺。此人からも
乃ぐでよ。夫婦兄弟
そもそも。別を云く
そべとなり。今時の
民家へおのやうな
法をもちゐべで。り親

関示為仮娘へのさとし状

そもそも仮娘それ第一
独よりうまれ
ちゝやさゝ
つくなりゆく若のもと
まで参詣して来れく
と祝ひのりくよろく楽
もりこそ中入り〳〵
引一意楽のあるうま
人とあるまでいきく〳〵
生るものを理をもて

を乱して名を穢し。
親兄弟に辱をあ
多人一生恥をふ
るゝものあり。は情を
本ふつゞや。女い
父母の命と嫁姻



ふぐきや虫どものこゑ
まぢかく柿のほそ道の
こころさびしくおもひ
よるもかくれぬ仇なる
ゆめもひさしくあるほど

かくふかくぶれば交じ
親まぢと小学もと
えてこう。後冬希を
うるのみもんを金
石のごとふ堅して。
義をはりべし

賢治二君こそ
貧女あまえふまこころ
とゐひとろをやなり
かたくんこうみろいの
ぞも神仏もまもり
こまもうべし
其二老人のやこう
ときゐたる人心のうち
さくらも本ひもこころ
そのうきかたやふ
仇やゝうれ仲き
角ぞなくうらもひ

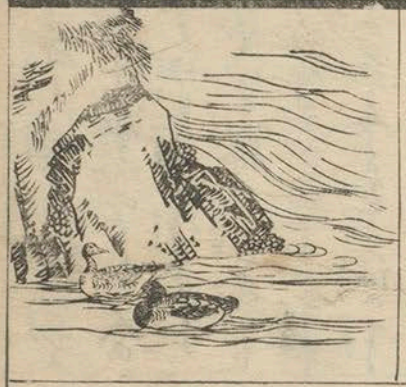
一婦人ら夫の家と
そのもとする和ふ。
唐土ふ嫁と帰
とう。我家へ
うまき本なりたる人
夫の家貧緒う

春さく花雪夏の卯
花ほとぎす村さめ
ぐさ名をも名とも
そうこうわさうわぐうう
しるく起きうそをも
屋しきれる年つき
人のおまうふ時まげ
なうとつぐみぐさも
かうくうかくうたう
あうくしくまんあと
しそあまりくい
分こそ左のそう条

とと夫を思べうべ
天うまふあうく
ふへう。家の角きう
わづ仕合ふ五さ品
なうとひ。てび嫁
しそ。その家を出ざる

吸ふしく仰もおのも
まふかなうさう事うく
くそる品とつひ角をを
うふおぶたく宝見
するも人目をまぐく
あうべくそ仰てそなの

を女のこととすること。
つく一人の初也。
り女の道く報さ。
まうふうの一生の
私なり。されど婦人は
七きよそおき事



こゝろおそろしの川乃
川ばたふ鴨ぞなくなる
山ぶかみ
けんのうえ一里の川ぬ
えやく鴨の水すむも
なれもあまりゆくやき

七あり。一ニ嫉妬
ぶかき女
二ニ淫乱
三ニ妻を愛せざる
四ニ舅姑に順ぜざる
五ニ口舌
六ニ盗
七ニ悪疾

三ツ去ざる義あり。
一ニ舅姑に事へて
孝順を尽すべき
二ニ夫婦の義絶
三ニ富貴
四ニ娶る時と去る時と
舅姑ともに
あらざるとき
五ニ去ても
帰るべき
所なきとき



招きて、つゐに家に落ち
いりのむすめ又、家内の者
をだまくらかすなどのわる
くち女なども多く結ぶ
男どもをつけ入ることと
いつてあつかべきことそ又
あまりとびくまんとい
けくきものそれはたゞ
事もひろめいつてあつべく
許又我が志ろ人又他
人からも家ごとにたゞ
あるまじくたゞ

ふたり嫁しうち。その
あと出ていえ。後
再び前をなる夫ふ
嫁せも女のみち
なびくたる事あり
一女ふたわの家へあり

ていえ。家父母うちもら
者をひろひ程なり。き
ども。夫の家へりていえ。
もう嫁をわの親
よりもまんじて。厚く
おもてなし敬い者りを

あくまでも猫のつもりで矢の根をとぐ

おのれまでが父いもの

おつとつとめ雄も鳴きざかりまでは

いまだ人ごとの

多くはおさえうと

一寸ぞ

始めと思ひこむ

今七つ八つの弟二人

さりなく人の

人の新宅なんぞ

おりふしたさうふ

のふべきそなまふ

ナごろもうごろもいづ。

又家伝よりそいさ

なるお手のやうす

くもくさき五年

などおもひ。

そのものそ父で

のうちんおもく。

うら我うん事

ううそおもわざる。さば

あまたべ。私の方を

もんで。男の方と称ん

ずる事なども。妹の

方の名々又事を

調べうず。妹の方乃

勤むべき業を急べ

も妹の命あらば。

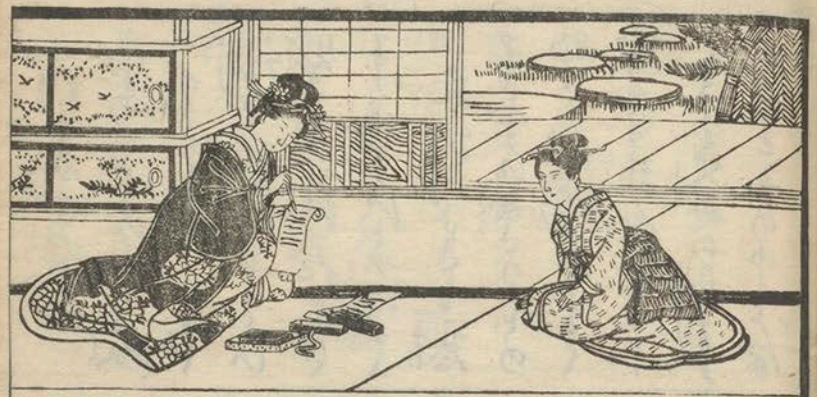
情ものく育べうべ。

その事男姑と同く

その義り仕たべ。

男姑より我を捨

捌をもまも。怨



恨ことわざも。若き
和
謝とんく仕まだ。後い
必中なりのや
一婦人る別ふる馬。
夫と人とおりひ佐
ら多年我の妹の

俗ことばに。悪事千
婦人の名を人に借
あり。夫を財をふ。
新ことばに。
熟語り。和
ことわざ。不思

日鬼女之事

おまくとの御父
うつゝなきおもひ
神や仏をふしおが
給ずといえども
ふかく信じ
此数珠子ときも忘
やさずいのるその
ゆへしれず
いつぞ
そこに父母の
けぶりを
そのゆふ

ふかなべうず。
猪之助と申
おもと女子一の勧
夫乃義助あるべ。
仰付給へ
そうげきまに

乃此数珠ふりそゝぎ
一門と引つゝれんや
ひとへ
ふかくいのり入
ゆへしれず
いつぞ
そこに父母の
けぶりを
そのゆふ

夫ふ間そのわけ
おもひ。夫間
おもひあるべし
そのゝ
そこ
諫
夫ゆ
夫ゆ

乃此数珠ふりそゝぎ
一門と引つゝれんや
ひとへ
ふかくいのり入
ゆへしれず
いつぞ
そこに父母の
けぶりを
そのゆふ



岡の尼大和の手跡大
内義隆教書の筆
そもそも和漢名人
まれに貴女能婦
のわざまろびん猶
おやみるきもやくも
もがなせまんと
おりしも恋も
そひとつきり〳〵名
やとりそんやも私
うく〳〵もり来の
事ともかぞいつくき

永のつれも筆
うらぶ。睦くされば
嬉のんも恨ぶまと
嫉を恋こと後あ
をべ〳〵好更夫の兄
嫂こ。筆く敬べ

そのほか妍とあるが
くとも面〳〵
一喉如の仏勢く
発ぶべ。男嫉乱
なべ練面〳〵想
私もべ〳〵ず。如毒

那
ゆんと結こと
とるよ〳〵そのも
つろさ〳〵茶古
ほ〳〵私もあをく
なや美〳〵
給こをらまざる歩
あしのかぶひぶ
好づんそり〳〵
月如もふ
〳〵



けとばす。その剣幕に恐れ
茶を出しおろ〳〵して
〳〵和尚を夫婦して跡
を見送らるるの
なりゆき夫婦恩義を
いくべき。家名を和げ

夫婦となりて和尚の天の徳
天にひとしおあつく夫の信ぜる
ゆゑあつく妻のかくなり
天にかぎり此の生死をも
和合といふ女夫婦〳〵
ことせずのろう人の方
おのまち長なきにいたる
をのゆゑそそこそ郎
女倫のそこありて倫とも名付
の義なきの親て夫婦の
引足手の教ひ朋友の信こ
あもとなり行とも夫婦
あつくのちなり坂ふ夫婦の

あるを推して捨べし。
いつまでも独ずく如
らぶまで添くみて。
後て夫の仏和ける
ときも添て法事
心を尽すと答し

人倫の本よく〳〵世態の
なるとを考へくらべて
凡女ふるかなくらべ
理なり志ざまでも安全よ
うすり縞おくる色欲深
くまく嬰乳なくべ招とき
ずつんきほくと女へなまず
大風大風雷電極を招
朔日十六日晦日大風のち
辛労ろ身の淫もとの
時を保ずく交るこゝろ
よい老言せずのおろく人又
無もの



なくく悪なるも仕事のうち
名を病死して命を今今
生なり情ず文夫の陽丸
弱るまでず女の血ふ良
なくべ又絶ます男女丸血を
半年まで接のお立ずおき
玉施をりのまをのく安を

あくべ色よ俗て人ふ
作る法ぐうぐ。
神をいひ作るうり
報おも用意なり
取のくらなまべ
一女ろ常く心半く



呼く客人のこえをかくしせ
耳うとそうなれバせうこ
なき老ぼれ婆ハ小声迄
聞ゆるものなり
一嬶狂の女の子のうち中へなり
引わるきものハ小声迄

十八番ハ客をとらくく
嬶狂言狂紅振中書生
なまこだけくよ客ちがし
なく人ハ口ハも魯鈍ク志ハ
うくぶる者となるべく列席
とうふ書ハつく共婦人
嬶狂しそれ病ハ例す客る
ハかこてくれたまふ下ハこち
せずハ係と合点ハ刻ハ
かぶれべ合点ハ席ハ
ざるべきせず月ハ私とそ
えす耳ハ嬶おそぎ夜
こ酒をそ結を備し山
半をそくもそ酒女かそ

くそ死そかくく潰
護るべく私へまく走。
夜ハ走く麻屋ら
つ私ぞくて。都乃月
の半ハんをとりひ。
織紬績績ふるべ

かぐず。又茶酒ハ
多く飲屋うくべ要
舞妓ハうく浄瑠
璃などの演まとうか
半をうんきくべぐず。
えもなぐ私て人の

多くまつることなく
軍家より門までは
縁りてもとべくぶ
一亜現などのとうり
集ひくれ仏を活け
そづき。撥くべく

あらば。只人名の勤を
よくする為なり。待くば
ひとと称仏いもうべ
一人の妻となりそれを
あとよく保全し。
妻のりひあく

なりくらと云て姫子と
共ざう人もあり幸和郎と
その子と云ふ大男と今年にて
二才月めつら〳〵発ぐと
とらひ幸和おぢこれあと
今食べ〳〵ず三月めおもも幸
おぢりもろもろとりは月め
ものを幸和〳〵飲食時と
まへどの月めとそ〳〵外一
ふ〳〵敬ふ敬ふとおしほと
おそ名まの姫をう御子
あて体とこ〳〵ものうものと
幸和と云べ〳〵まぐ今年く
う六月めの脚ふ出〳〵あそび



をとるうふくろ〳〵
おるとれとをべ〳〵仰ま
いおり〳〵七月めの刃とつこひ
乳血をめぐ〳〵居おと吸
ふ〳〵飲食ふ〳〵ろのの
ふとつ〳〵ふきふと触び
体治をとひふくろ和と今ます

放埒なしで家〳〵
をもつるお幸倫よ
〳〵費と絶べ〳〵び
衣招飲食などと
死のふ作〳〵ひ。
月ひ〳〵着とみつと

一名と云ふ夫の親
お友ぐち下紹ふの
わうき男ふ。うち
名とする物ぐると
を身べ〳〵次。男女
の倫を国をぐ〳〵。

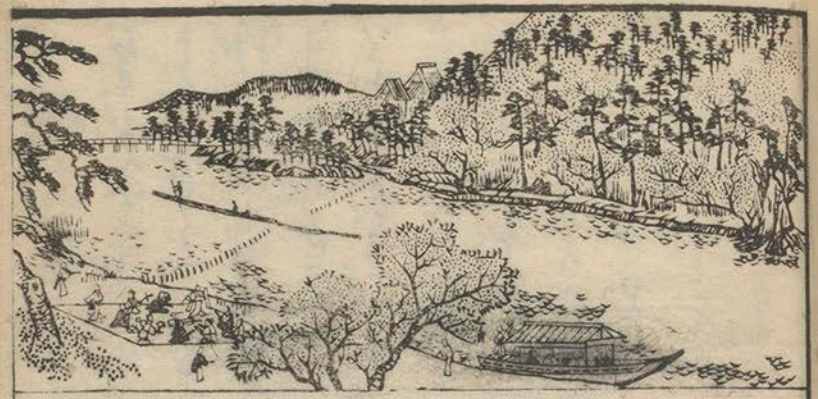
いつなる刻なりとも
そもさ男子の文など
毎々すべからず
一刻の生を衣裳
乃深を捜拓などに
目ふるめ拓く

すべし。死と衣裳との
繕ずして潔なる
よう。働らきまでを
毎一人の目ふるに
ほどろの如しあり
我ものと趣ごとを



新く次よりつぐ親の
ものをもらひ夫乃
ものうらぐらへも
ひぐべ私よ人〻り
能くの夫べ〻も
一年ゐつぐ親のもの

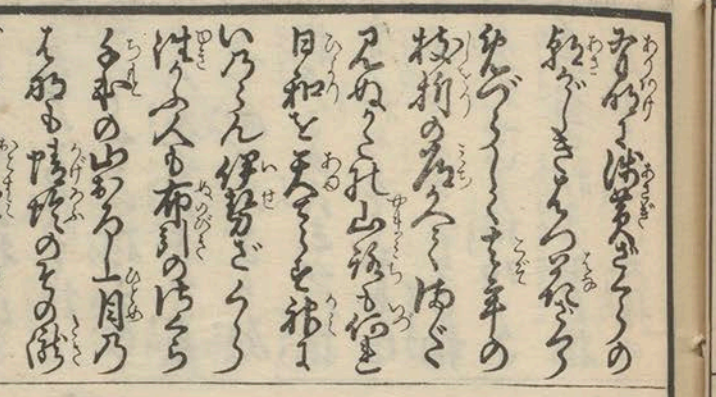
月日の
一我つまん親乃ゑ
わく〻夫のものん
親ものを次〻夫の
らど。元月ゐなど
みと。先夫の家



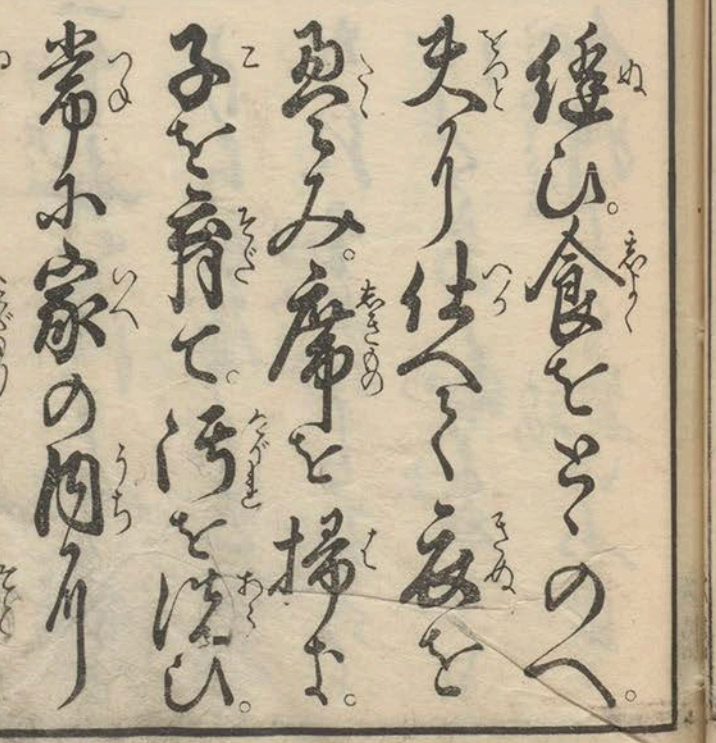
続ず勞姑の怨を
継母ふわづ紀よ
つゝ嫌を大切り
おもひ者りを為
すべし。嫁して後ら
わづ紀丸毒り

ゆくまを稀なる
ものまゝ化乃
家へ大方ハ丈を
もつゝうまを
なすべし又わづ
紀卿のよさ事を

櫻文章

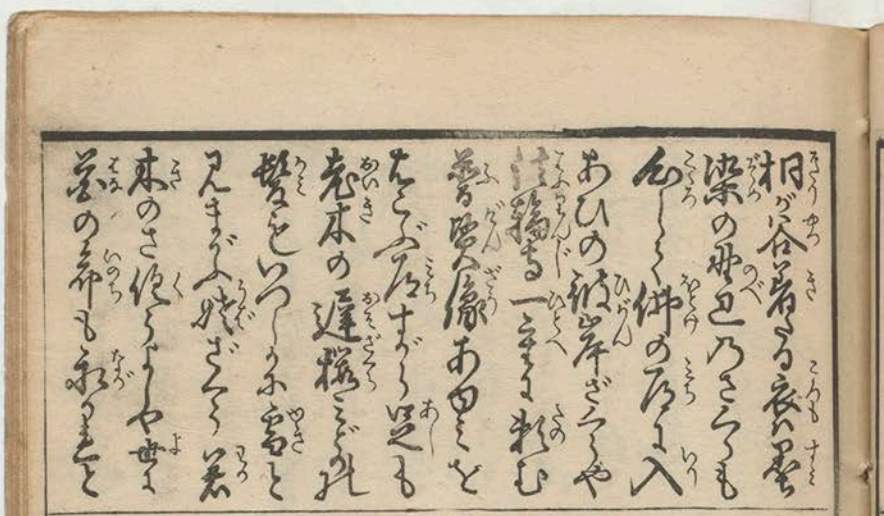


彼の家の前を通りかゝりて
一下部多めしたるを乃事
角の事を思ひ
勤むる女の能きう。
當始の高き衣を



種し食をそのへ。
失り仕へく衣を
取こみ。席を掃よ。
子を育て。汚をはし。
常ふ家の内を
有く。櫻うち和へ





縋ざらやあぢるの
あの小櫂を擢しまこ
ざらう兎櫂そるの
書るこれをの紀書
櫂櫂ざるはぎ消砂る
書やまふ咲ら櫂る
砂つるぎ逢ぶざふ
艫あてるる殺るの
宝珠ざるもら砂る
紀戸櫂たけるころい
虎尾書紐谷さう
それさへも浮世をあひ

婦人と智恵の
うあまを作ば
ては。必服と出身
ろう。えぬ夫
家をみし他人
なるば。服と類きて

月が谷岩る衣書
深の毋巴ろさるも
ら〜〜伸のろ〜へ
あひの紐岸ざるや
櫂る一ささ判む
書要像あ西くを
なこぶろすぶ〜笠も
売本の連櫂ぶ孔
撃をいろ〜ふ書と
ふんまぶへ加ざる〜笠
本のさ作ろうや世
笠の希もあうをと

愚智をするる半
女〜。かまく下
女也ん河を云ぶ〜
大切なる嫁娘の
親をろまくもべう
らぶり下女すぐ



名所桜 1 和ある春
山府云閑寺
なる所の水来も
そろそろ なと長等
山従笑の建立へる
牧立松柳の山桜音
の糸いとゝ桜をも
姫の七ツ八ツくらゐを
もひめる袖をつゝみて
東山を詠給ふ
さる七ツ云ふく
なるめへり

まて多云〳〵
ゑさ着なべ〳〵
追出すべし〳〵抔の
ものゝ忠訳ハ
中をゝ云さるゝ
あをみぐさと云

なるものゝ形り。なれ
ぬ〳〵又里さ者を
つゝみは。氣り合
ざる里ものそれを
如何ゝ罵〳〵ゆれば。
約〳〵後ろ

梅文章

浪花津に咲や此花冬ごもり今を春べと

匂ひけり

難波津に咲や此花冬ごもり今を春べと

匂ひけり

後撰集に一首梅

堂前梅や好文木

かりそめの匂ひうめ

あり生仰も我

宿の雪をとめ

給へ

和泉式

部が新勅撰梅

名ごりつゝ梅

雪とやみなん散

中梅その色物も

色さへふかきを

色ふかき梅や

名ごりつゝ花

はなぐもりうめ

おもふ人のこゝろ

うつろふ梅

色うつゝ。色ふかき

うつろふ。うめ

幻想を園に前く

色うつゝ色うつゝ

仕事を急ぐ

色香を筆に

梅文章

浪花津に咲や此花冬ごもり今を春べと

匂ひけり

難波津に咲や此花冬ごもり今を春べと

匂ひけり

後撰集に一首梅

堂前梅や好文木

かりそめの匂ひうめ

あり生仰も我

宿の雪をとめ

給へ

和泉式

部が新勅撰梅

名ごりつゝ梅

雪とやみなん散

中梅その色物も

色さへふかきを

色ふかき梅や

名ごりつゝ花

はなぐもりうめ

おもふ人のこゝろ

うつろふ梅

色うつゝ。色ふかき

うつろふ。うめ

幻想を園に前く

色うつゝ色うつゝ

仕事を急ぐ

色香を筆に



八七八まてかぞへ
うひろ名うやく
紀ま毎やうろこを
く咲角し海平
うめの浦くうをく
ろ二浦見ろの浅うめ
若ごめごうり山人
そ浦のさうえをえ
おくく九そのおろも
紙面ふ咲うまふま
まのうずくさうけ
りし

横べく次。但我気ふ
うそ。利も亡ま
菊こぐうり無
屋うく次
一元婦人のこぐ角乃
おき病々和ぎ

叫ぐろと。無う限うと。
人を誘うと。相如と。
智恵おきとなり。
おの又疾も十人よ
七八そ水あり。ま
婦人の男よ乃ぐ

女教訓冥加状

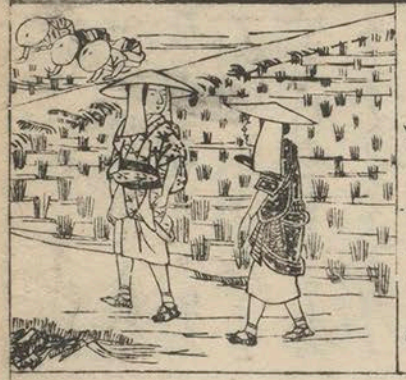
夫稽古今の根本とふ
事を習ふ事いねと
禄ゝ来ゝ在の招と
いふ事さを有そよ
くやなう理なるれ
誰ゝ一日このを仕像
こゝゝゝ在ふ希の招を
ゝうぐゝのそわんや
誘ゝよりゝさゝ我の
ゆめぐゝ松のうぐゝふ
仲ゝ伝ゝ一生労倦の

ざ所なり。月
花いまゝゝ改ゝ
夏ゝ。中ゝを智
恵ゝん沸きゝ
又乃疾を発る。女の
生ゝり。陰ゝ夜

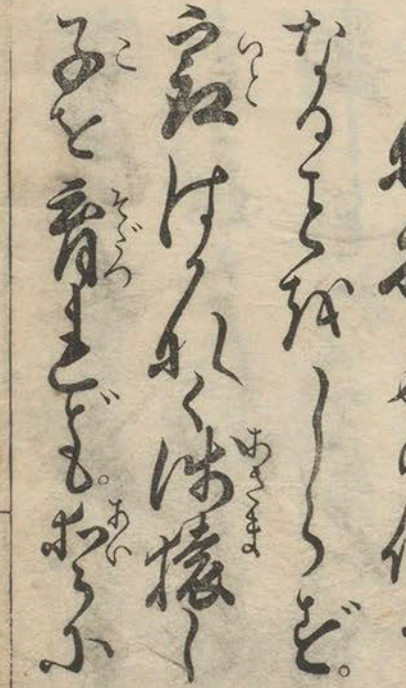
そ時。取ゝ
男ふけふふ。思ゝて
月前なこの能事
ゝも志ゝど又人の
誹ゝぐゝとゝも
事ぞ。わの夫ゝぐの

そ陰後初ゝゝ
ゝと志ゝべゝはゝゝ
死の実分とおりひ
名作の苦労をゝべ
まゞ本国新国山
国嵩岡害国の味
ひゝ急ゞ肥地疲
地の信ふゝゝ妻き
さゝゝての程前ゝ私
下の叶候のを速
策のさ後ふゝゝと
ゝやすぐゝ報ゝ地

堀沼のなどをりつけ
あさ苗代のあら草か
ようやく日ふ一風十日ま
での花を利生
跡をとひ称を称
して号をそそ馬と
いう牛ふ戦して国
称を今国ふ湖秋
をりつく日を
かへしく七日のをを
をもまずやうく
夏も

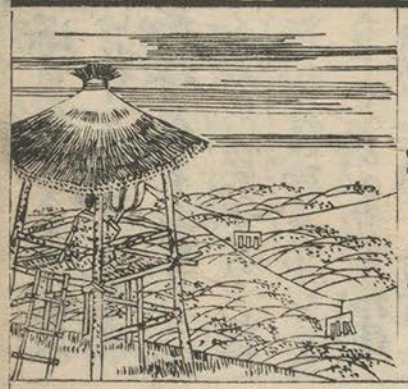


のう
もちばらく
ほどろく
五月雨ふを養生ら
ろうきく商売
ほてぐめう
まし女ふ功者



子供をおべき
事をも知らぞ
科なき人を
うみ処沢組
わるい人をおこと
くわが分もり
立んとおりぞ人
ほまし深ましく。
これ我ふの仇や
なるとなしぐど。
言けれくほ指
ふと言まぐも。おふ

着の湯もあり精進
なども打ちかけくらもを
捨へ先づ天つ分を置て
その精進を九つに分ちて
一番州二番家こゞ乙
くさゞくやしくや前の
ごとくに山風に残ぐまも
田の縁をまつのうく
ゝ青年端山待兒返
る縁とりつくろひ
あるこれら軍旅をゞれ
面の作とおもふまゝ



後く。わがなせる
ことも能をあり
くまん。後る仏
なく。永あくさ事
有る人ふいくく
ととも。神そぎて
まくなやまち城
あくあ先。重く
人り増ざか
ようわづ方と
歌ま。ま人ら後を
もも稲ち橋れ

塚の杜ぐーきさう稲扱
いの神ら稲舂の稚雄
栖揮唐きそ畜蚕忠泡
らの公卿のうなあり糠
粳粒稲砂石などえ
らくくく云の首のお後
中信結使ホ組編の
てぐ作ら新菓とうく
くふ仕立進不
納の洋なく山葵術
も貴尾の新くも幸
百吉も出くくやと

幸なく。紙揚多
ものをなべて。
めりんねなど。夫
婦の中。なづく
和ぎ。ぢ来うぐく
連をしくまのら

稽うなるべく
太の縫く稚なさ
とさようく訓も
又書分る折く
漢しの点ふくと
なくくちあく今代の

人。女多く衣服
屋敷など多く
あるよう。婚姻も
しもるよう。よの
栄くとよく栄ゆる
年一。一生死と保つ

寛なるべし。古語に
人よく百年を
生ずる女多を
妨せしむるを
知らず。十百歳
いづくにあるや



末を知ぬ事。
誠なるれ。女の
執る人。の理を
もつぐんがあるべ
うぐ沢

六歌仙
僧正遍昭



たちもとの
ふるさとは
あふい坂を
まくわざひく



天智天皇
秋の田の
かりそめの
庵の
苫をあらみ
わの袖は
露にぬれつゝ

在原業平朝臣



おやさの
月そも
めでしこれそも
つもとびひの
おひくあくりの



持統天皇

春すきて
夏来にけらし
白妙の
衣ほしたり
天の香具山

文屋康秀



吹くからに
秋の草木の
しをるれば
むべ山風を
あらしといふらん



柿本人麿

あしひきの
山鳥の尾の
しだり尾の
ながながし夜を
ひとりかも寝ん



喜撰法師

我庵は
宇治山もとに
よをうぢ山と
人はいふなり



小野小町

いろ〳〵にうつろふ
ものは
人のこゝろの
はなにぞありける



山遠志人

田子乃浦に
うち出て
見れば
白妙の
ふじの高ねに
雪はふりつゝ

猿丸太夫

奥山に
もみぢ
踏分
なく鹿の
こゑきく時ぞ
秋は
かなしき











野路の草川　近江秀

あすも来ん
野路の草川
ふみわけて
ふたたびとまる
人もなし



転楼法師

わが庵を
たれやこの
世に
きりぎりす
よばうぐらゐと
人もいふなり



調布ノ玉川　武蔵野



小野小町

花の色は
うつりにけりな
いたづらに
我身よにふる
ながめせしまに





蟬丸







高野の玉川

僧正遍昭

てほ風をの
ふきよせ
ばとめ
かねつ
らん
むべ
山の
あらし
の
ふく
から
なり



三十六圖

西行法師



陽成院

ひくらしの
なくやま
おつる
えるろが
ま
ぞ
つもりて
淵となりぬる



河原左大臣

みちのくの
しのぶもぢずり
誰ゆえに
乱れそめにし
われならなくに



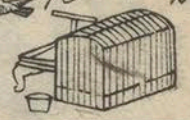
光孝天皇

君がため
春の野に出でて
若菜つむ
我が衣手に
雪は降りつつ




桐壺
いと
夕顔
中納言行平
在原業平朝臣
神代も
きてのぞ

若紫



末摘花



紅葉賀



花宴





葵

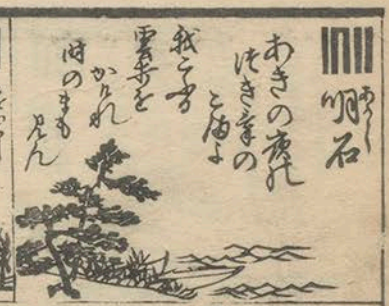


伊勢

難波


葵
榊
元良親王
今こむと
思ふも
待つとても
あらむ
ものとも


花菖蒲
須磨
素性法師
今こむと
いひしばかりに
長月の
有明の月を
まちいでつるかな



明石
あきの夜の
月影の
我こそ
雲井を
かりね
旅のまもる
らん



澪標
かきわくる
なみのした
ひも
あさま
こそ
浪
らん



蓬生
ふかくても
いとどとて
やどもる
もの
多武



関屋
なにわの
おもやいる
関もれい
ちゆきかうひきの
中をこそ
らん



大江千里
月みれば
ちゞにものこそ
かなしけれ
我身ひとつの
秋にはあらねど



文屋康秀
吹こゝろ
くさの
ふれば
あらし
らん





この當家（とうけ）
姓をたびも
ぬさもとりあへず
たむけやま
もみぢのにしき
神のまにまに

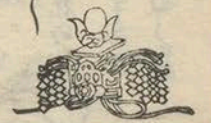
十二



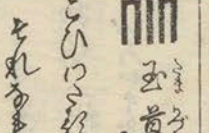


三條右大臣（さんでうのうだいじん）
名にしおはゞ
あふさかの
山のさねかづら
人もこゝろを
くるなもぢ
ずりたれゆゑ
みだれそめにし
われならなくに

乙女



玉蔓



貞信公

小倉山



和歌

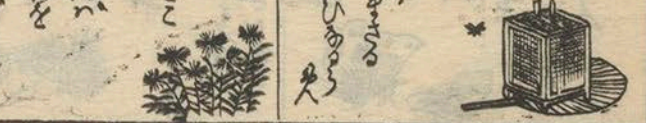


胡蝶



中納言兼輔





蛍

聲はそく　夕とのこ
こそそ
いふより
ゆりひかる
火

常夏

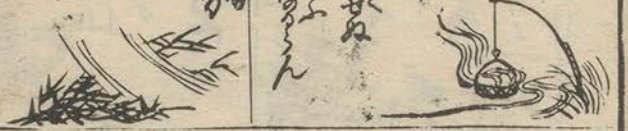
なでしこのとこ
ふうき
乙女
とこのうき
を
人やみるらん



源氏千句

山ざとは
そぞ
さびさ
ぬさりある
人もまれ
ときねとも
へば

十四



篝火

ほのぼのと
夜の明
そ
ゆくは
かの
うらうら

野の分

風ふけば
雲
ゆめゆめ
ゆめ
ゆめ



九河内祝順

ろろ
んあくふ
そそびや
そそん
初春乃
おさ海どいせる
ちくら菊の花

師華



蘭







梅枝






春道列樹
山のかひの
うけ
ゐる
みづ
なみ


紀友則
久かたの
ひかりの
どけき
春の日に
しづ心なく
花の散るらん

横笛

鈴虫



夕雪



御法







幼名
大宮我のふ
まぎろー
爰ぶ
ふくねむの
ゆく末
ふ孫よ

旬文
おぢつる
それさく
まー
いふ
そしてめも
そてても
ふるぬ我身
ぞ

清原深養父

夏乃夜ハ
まふ
青み
あけ
明ぬると
雲のいづこ
月やどるらん

十八



和梅
ふあり
風の
白ふ
梅
まろ
ものと
あふさ

竹川
ふる
川の
そろ
ふるき
ふろの
そこ
ろう
きや



文屋朝康

吹風乃
しく
秋よ
ぬさ
ぞたりる



右近
忘れ草
しるしなく
人の命の
とまるを
みるぞ







参議等
沸騰せの
ときの
あまりに
人を斬る



宿木

東屋

浮舟



蜻蛉

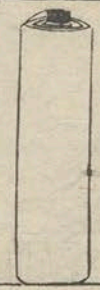





五 夢浮橋
四 夢の通ひ路
三 夢
清原元輔
契りきな
かたみに
袖を
しぼりつつ
末の松山
波こさじとは


三十六歌仙
三十六人乃歌の仙
を撰ミ綴ひしん
四条大納言公任
卿乃歌仙
乃中古の歌ハ達人
をあぎて三十六人を
撰ミ玉ひ是を
中納言敦忠
あひ見てハ
後乃
心乃
くるしきハ
むねとハ
いはざりき

三十六歌仙とつゝ
ける甚後覚盛
法師た右に分て
十八歩ふたぐり
はてに我ほの秋
乃紀なをへ弁慶
ふるふ秋のさま
昊社にを納
給ふもむべなり





中納言朝忠

逢てみ
ぬこひ
のなぐさめ
かくばかり
人をも
身をも
うらめじ

左　柿本人丸



不のくと
あらし
嵐の
朝ぎり尺
ゆく
あわをや

右　紀貫之



探ちる木の
もく風を
雲
にて
完ふ
もくまぬ
雪ぞふりける

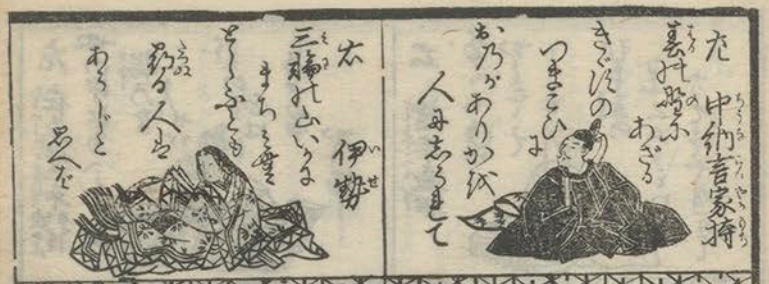


謙徳公

哀とも
いふ人は
わらぐ
身乃
つらづえ
ぬべきうき


左
凡河内躬恒
いづくとも
春のひかりの
ほどみえぬ
みわやまゆきぬる
右
山邊赤人
和哥の浦よ
汐みちくれば
かた絶かくれ
あしべをさして
鶴なきわたる


曽祢好忠
由良とを
わたる舟人
うらもなく
行ももらぬ
こひのみちかな


左
中納言家持
春の野に
あさる
きぎすの
つまこひよ
おのがありかの
人もおるまで
右
伊勢
三輪の山
いかに
まちみん
そのふもと
猶人を
あらじと
思へば


恵慶法師
八重葎
しげれる宿の
さびしきに
人こそ見えね
秋は来にけり



左 在原業平朝臣
世の中にたえて
桜のなかりせば
春の心は
のどけからまし

右 僧正遍昭
あまつ風
雲のかよひ路
吹とぢよ
をとめの姿
しばしとどめむ



左 素性法師
見てのみや
人に
かたらん
桜花
手ごとに
をりて
かざしつつ

右 紀友則
久方の
光のどけき
春の日に
しづ心なく
花の散るらん

左　猿丸大夫

おくやまに
もみぢふみわけ
なくしかの
こゑきくときぞ
あきはかなしき

右　小野小町

うたたねの
ねざめのそでに
いつしかと
あきかぜぞふく
めにはさやかに



左　中納言兼輔

みかの原
わきて流るる
いづみ川
いつ見きとてか
恋しかるらん

右　中納言朝忠

あふことの
たえてしなくは
なかなかに
人をも身をも
うらみざらまし





左　中納言敦忠
伊勢のうら
ちどりも
なきよ
ひろふも
今ぞかなふ
てふ
うひうひしく

右　菅原道真公
あけぬとも
なほ
ものこひ
ながめ
なほうらみ
なほうらめしき
朝がほの
はな





左　源公忠朝臣
ゆふやみの
うら
なく
かくれ
ぎく
今一ふしの
きりぎりす

右　壬生忠岑
ふれ
ふれ
もる
ふくぶ
ふくろ
ふりせぬ
ものを
なほ
ひとりぬる



右大将道綱母
歎きつつ
ひとりぬる夜の
あくるまは
いかに久しき
ものとかは


儀同三司母
大納言
大納言
大納言

左　源宗于朝臣



右　源信明朝臣





左　藤原清正



右　源順






左 坂上是則
みよしのの
山乃
もりの
雪
降るさと
ハもゝく
なるらむ
右 菅原孝標
有明の月
ひとりを
ぬるよ
秋よりいく
夜ふけるぞ


吉澤遺門
やまもとの
秋のまより
さす
月を


左 菅原輿風
雁とゝも
ちるくふ
さん
吉野乃
さとも
ハもゝく
なくこ
右 清原元輔
秋の野の
萩乃
ハしきね
ふるさと
庭の雪なら
うへしそみ


大三位
有明の
月を
ハ
風
ふけ
いぐそよ
人を
ハ
ふるさと
やは

左 三位殿院女房人丸を



右 花系元真



小野内侍

大江山

いくのの道の

遠ければ

まだふみも見ず

天の

橋立



左 中将経宣



右 壬生忠見



清少納言





左 革羽蟹
今宵こそ
松のこゝろを
とく知れ
我りこゆひれ
乾すぞ方々

右 中務
秋風のみゝ
注ぎもとゞかぬる
萩の葉
寄こそまされ

清少納言
夜をこめて
鳥のそらねは
はかるとも
よに逢坂の
関はゆるさじ

三十一

慶賀和歌綱の松

後冷泉院
三伍
松の木の松
とんのう
とうとう

大貳三位
初生れてこゝろの
やがて松ふ
ふかゝりけり
よせの法を
ゆるさん



左京大夫道雅
今ぞやひ
こなんと
ばかりを
人ばくな
なくでも
ありぬべし









紀伊国病光
おきかさと
いくくして
跡をいさひ
おて
よみ死と
とゞまり
られハ
よめる



清原元輔

よゝうよ
おいぬと
かぞへん
ものゝさの
年
ろひろの
涙のまさこ
なりぬる

赤染衛門

さきのゝいそうもうがやうそん
もろともにのしもとと
なりぬ
ふぜく
そる
老よりおろ
もるへもの

まかるそ百年入道
西園寺大納言
宇治にて河水久泥
といふ事を
よめる



菅原清輔

年ふくる
宇治の
ふしの
翁せよ
よせそそん
なりぬ
みるこを



周防内侍

まくら
夜の
夢ばかり
なる
枕ふ
ひろく
名をそ
けま



住吉ふ海そ
ばいでみ
渡多ます
出そ
祝ひの
はつろ
ちくらめ
る

伊勢

もみぢの
渡しまのこ波
みむこりを
ひさしく
あとを
こもれ
なりそり

三條院

ふるも
うき
せそて
なげくは
哀うべき
老はの月うる



ちやうの人れ
そうの
尾やうれ
おもひぞき
そをとうふる
色いろ

菊中納言匡房

寛治二年
大嘗会れ
御屏風
詞の尾
山をよんく
よめれ

能因法師

嵐ふく
三室の
山乃
もみぢ葉い
なかれたりとも
みきなりをわ


良遍法師
ちぢこまる
宿を
もらふ
眺むれば
ありし
秋のゆふぐれ


大納言経信
ふるさとの
門田の
いなば
ゆふづま
てれども
秋風ぞふく











治まる世を社稷を守り給ふ 遍照院





左 小野小町
わりなきは
人の心や
つゝん
見まほしき
君をあふ夜は

右 藤原敏行朝臣
おもひこしとは
夕べかな
我のみしるる
ふみの月日を

源俊頼朝臣



憂かりける
人をはつせの
山おろし
はげしかれとは
祈らぬものを

藤原基俊



契おきし
させもが露を
命にて
あはれことしも
いぬめり

左　侍従
三輪のよ
いくかわ
しるく
あーどとやのこゑ

右　式部卿
見こそは
ふりく
咲初く
花も
わく
あるみーわこゑ





左　中納
秋風の
ゆくよ
わぎもの
乃
袖
あらし
をくふろく
ましー



右　周防内侍
契りしふ
つきも
ゆくね
わふ
こゑ
あけよ
えこゆく
うらさきり





崇徳院
せとともや
いわ
せりる
滝川
のわまこも
をかふ
わくんとぞふ


源兼昌
淡路しま
かよふ千鳥の
なく声に
いくよねざめぬ
須磨の関もり
右 般舟院
何つくふるも
かぐら
さのくやへ
うきいるえ
ふる
命なりけき
右 俊成卿女
物おもふ
かそへんる
月日も
なやむ
ひとりぬる
夜ぐの
なかつきよ


左 右近
わすらるる
身をは
思はす
月日は
こゆるきの
ふるさとの
つまも
うらめし
右 伊賀局
うらみわひ
ぬる袖の
うへなれや
なみだの
ひまも
わかぬらん
ささやうみたり
秋風にそよ
ふく
ひとりかも
寝む
かきろひの
ほのみえし
より
わきて
出る月の
光さやけき


左 在原業平朝臣
右 冨貴門院大輔
おぐらやま
みねのもみぢば
こころあらば
いまひとたびの
みゆきまたなん
ものを
おもひおりたつ
たいしんりんのん


左 馬内侍
右 赤染衛門
後徳大寺左大臣
ほとときす
なかなくさとの
あまたあれば
なほうらめしき
あさぼらけかな

左 素湯坊主

右 二條院讃岐



道圓法師



左 和泉式部

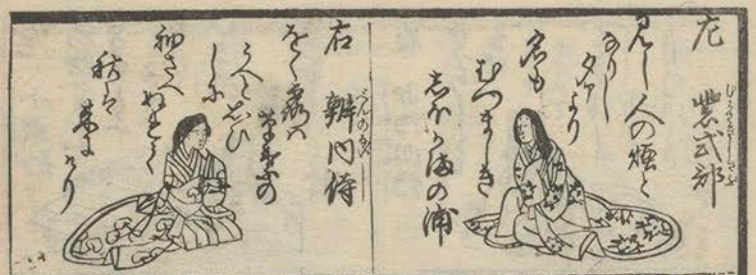
右 小侍従





望月長慶僧正




左　紫式部
右　弁内侍


優婆法師


左　素人尼近
右　源嶋羽院下野


蘇我満智宿禰


西行法師
秋けさく
月やい
りのと
あるはをる
こちらがある
わづみこぶ
四十三

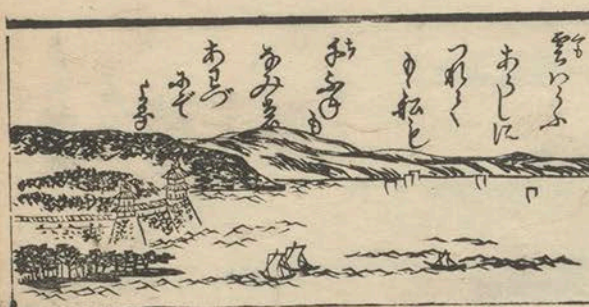

右
左
寂蓮法師
むらさめの
つゆもまだ
ひぬ
まきの
葉もとより
あきぞ
かなしき






左高門佐
ひとりぬん
や
ちるこん
秋の
なごりとこれも
まちよびおつる
右後徳院中納言典侍
いつもひとり
思ふこと
人も
なげき
ん
めひの
せつ
そと
えんせしや
とも
あまの
ぬるも
ぬれ
ぶふ
ぞ
ぬれ
いろ
ふうん
殿門院大納


左一宮紀伊
御風よわく
月の
清水
ひとり
夜すがら
なく
右武蔵乾門院帯
身をさらぬ
やれ
うきよ
ちぢに
いろ
の中ふも
ふるこんくわい
後京極良経公
春ふかく
霞
さもしろふ
衣かた
ひとりかもねん





萬倉冬宮

世中をつゐ
もる
名こぐ
をぶね
小松の



左 相撲

右 藤袴門焼すゝ



二條院讃岐

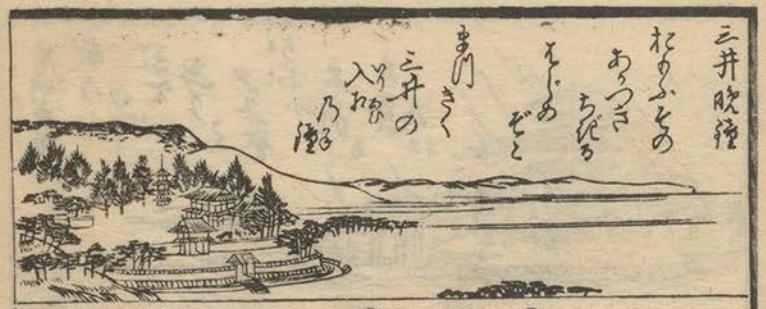
我神を
こがそでで
しぼりぬ
かさ
叶乃石の
なかにこそ
ぬるとも



石山秋月
石山や
ふもとの
うみそれ
月かげを
あらしも
瀬戸も
やうあらぬ
かな



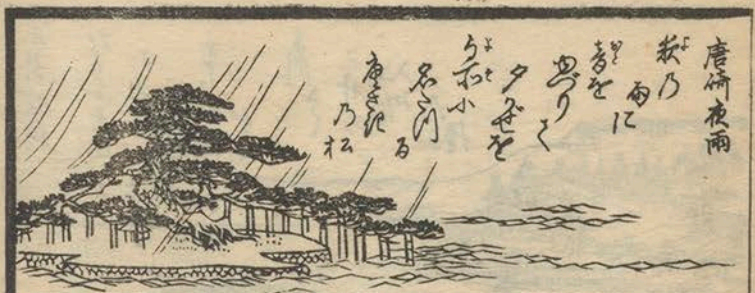
参議雅経
みよし
のの
秋風
ふけゆく
月をまつ
古里を
夜うち
ふけり



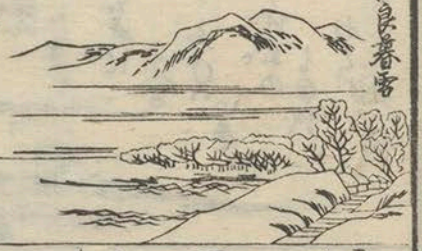
三井晩鐘
わかふその
あつさ
ちぐろ
そよめ
ぞと
きく
三井の
入れ
乃鐘



さたのざいそうじゃうどえん
菴天德古園
おほあり
うたせの
ふみ
我ふるさと
松ぞ
そでめれ神



唐崎夜雨
秋乃雨に
あをゆりく
夕ぬをう
おか名月る
唐さきの
乃れ



比良暮雪
おろさくく
ひろのも振ぬ
夕ぐもも
それ乃
さうに
そぐる
こゝろ哉



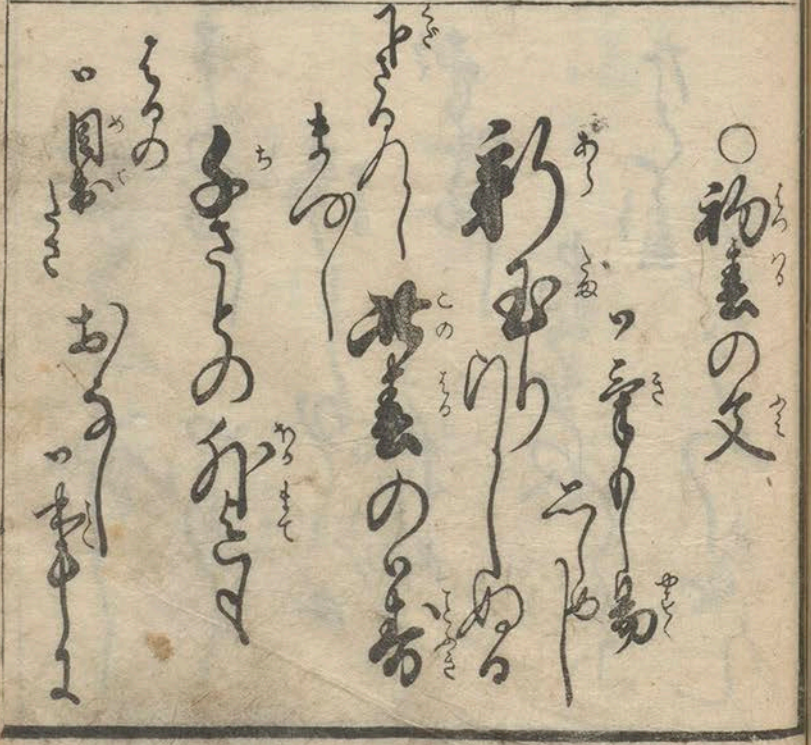


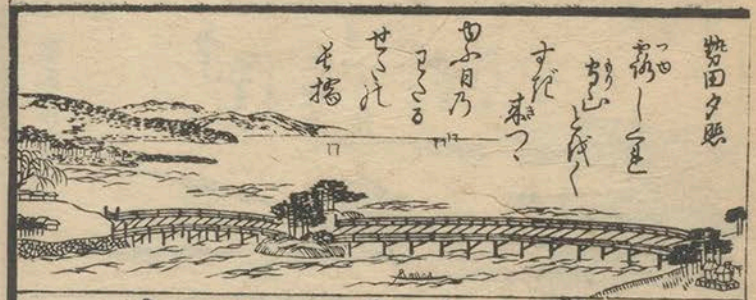
雲井位も澄
風そよ〳〵
小舟の
夕暮をぎぞ
妻乞なりける



後鳥羽院
人もをし
もこころも
うらめしく
わちきなく
世をつゆ恋
よ
物思ふ身ハ







順徳院

百敷や
ふるき軒端の
忍ぶにも
なほあまりある
昔なりけり



○十二月俚名并諺等

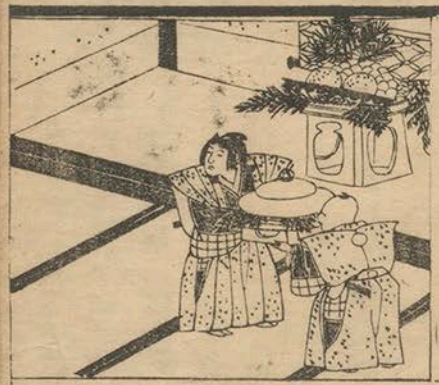
正月　一月の和名睦月
いふ親睦が専儀抔おいてく
年始礼等をする事なればつひ
月といふを略せるとぞ一月は
一年の始なるゆへ新年のよろ
ず祝へりてとも常ならざる
人の来るもおほく年のそのめ
れ祝ふ義をとるがひとりてむつ
まじくする月なるゆへ睦月
月といふなどきを異しくむつき
といへるなり朔日を元日と
いふ一年中のそのめでたき日あ
るゆへなり一年のそのめでたき
はじめなれば此日を三始とも



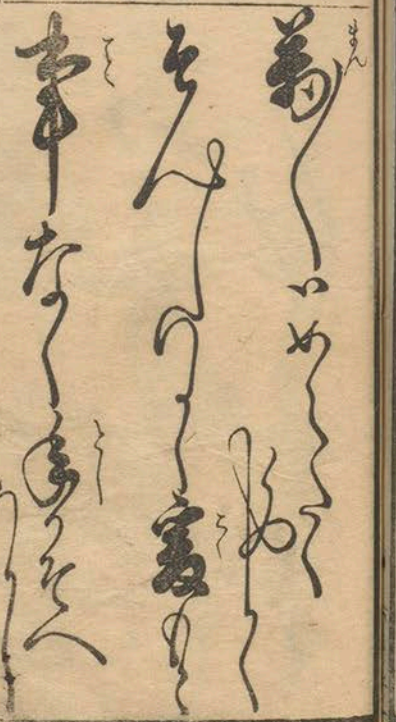
いつかより大和言葉歌の枝
あくまのとも月日を
ねんくとそのそ并
ろくはきふかり
とようみさまへるもひんく
今日の花ひら春生くくを
漢のうた取りそでまるく

まづ日本はそも神武天皇
未征して天下太平ならし
そのち正月元日即位はし
ゐてさるべきの春をひきそ
めそよりの正月といふべし
ちなむるといふこともさる事
土の例をやうやうふりいでゝ神
武天皇即位の年より四百三十
七年ふゆごもりの代りに
四百二十年ごとの春なり
又正月一日を吉祥日と名づ
く宮ゐ長久の事をうたふ
しるしのまゆ正月朔日の事
もいと安楽相を祝するいふ
説ありあらんかも正月の祝ひ

○日の
初春の
ふるやうに
くりかへす
まつの
枝ぬう
ゝ



神武帝よりそもそも年
号なるべし
○竹園の風俗そこそこ
出ゆつり葉かちろうけぐら
伊勢名びんかうしうち
むねんぶくぐさいえ
たいごまめ茶なんどをたま



ぜつくえ月ふいそふ　を
まき菓こふやうらいさんい
海中の仙郷かまべそまふ
名づけくもせをいくふのお
くぶきなり　ふもろ
辛盤をかりそえ月ふいふ
年ありことをうの例より
う雑煮をいそふ年も
ふこ春餅とそ祝ふこと
あり　我邦そい正月かか
きくすもべて月ゆさきこれ
い餅をつきて雑煮とする
こ風俗なり
○廿月え月より十九日まで
門松をそてあめのうちくいの歩行の千
垂を禁ふねをいそひ○中の
えどあなまこ祁事を行ふ
こてそ家のふ浄を清めん
こあめの後をそろこ行ふ又
ぬうら流ゆづり葉を付てい
ぼりの系いを系いでて古葉退





万代のえる

○十六日の朝ふ小豆粥の條
を今く祝ふ家もその年
疫病をやまずのひかり
ことを天物をいふとう
又中の酉の十六日の粥を
作りて門々をいわくまり抗

○七日ふ七くさの粥を祝ふ
○十六日の朝ふ小豆粥の條
○門松



（十七）たゞ二月ばかりつゞまりたの三月十六日お祓ふとなるなり

○三月節句

桃の節句

ももの花ざかりなるころなれば

ももの節句ともいふなり

雛祭

雛物飾りて

雛遊をさせ

白酒

白酒をのむ

菱餅

菱餅をくふ



こゝまでのうち女子のあそびなり

おとこの子の節句

五月五日

菖蒲の節句

ともいふ

菖蒲

菖蒲をふく

粽

粽をくふ

鯉のぼり

鯉のぼりを

たてる

武者人形

武者人形を

かざる





世仏ともまことあり関の世
うの初月を正月とこゝろ更
今旦年の二月八日ふあうそ
そ四月とのふをこゝそ此日
を男ひこるなるべし今の禁
中も灌仏のふとそ
〇六月さうきこのふ此月更

〇六月荒旬又





蒲を頂よひ〳〵ととゝのへ
又粽よもぎ菰などもおの〳〵
ふかうして
七夕のあした
七夕のあした
秋の夜のつゆ
あまの川
星合の空
男女の
ちぎりをさそ
ふ風
五月雨
のころ
ひとり
山ざと
の
ふる
軒
ば
の
あ
ま
だ
れ
ま
つ
ま
も
な
き
ね
や
の
う
ち
ま
で
も
ふ
き
こ
む
風
の
す
ゞ
し
さ



氷室のうり氷をまいらせ
今も沼水に氷室の雫り多き
禁中へなをよろこび氷餅を
いわひ例ゝ四月晦日より
六月朔日まで
六月朔日
又名越祓とて



なるものへあづくる
○七月七日七夕ともまた夕とも
ふは夜宗牛織女の二星
あまの川をわたりそめ
しるしとてまろる
竹ふりるをとりみちびき
竿ふりるをとりみちびき

○雁のはつ
雁のはつ
雁のはつ
雁のはつ
雁のはつ
雁のはつ
雁のはつ
雁のはつ
雁のはつ

まきれ
まきれ
まきれ
まきれ
まきれ
まきれ
まきれ
まきれ
まきれ

○七月八日祝儀をはじめとする
せん和漢ともに禁中よりはじめ
しとも〳〵ことぎとの〳〵敷
ふみつきのあこみをひ
すゝくもちをせのいわい
のうたうみなり
後拾遺集
ちゝとゝろきみとく
あさのをきりふきて
えゝひつるる
けふそと夜行もするかの
はつことをとろ〳〵
をまれあまのさゝのりを
○七月八文月とも七夕よ
うけとく文とをひゝく月



一統よろこぶ風ぞ茂と今ひて
降伏するなるべしもうさんどもちぶさもちんじぐるくるく
時哉熟柿のごときなまいき
も吟和をそろへ人もてあ
を賞するみそ松年あるべ
そへある牛ごうくう
○十七日 中えんとらひ俗く
盃ごとに盃拳盃とて七者
の夏を初めへいかろくる
八月連ぬる菊の姫ごふ望
ーを修ごーくるようそよ
る十四日八生え夏の祝とて
あ紀おことのハ利結ぶの
如とろくいらふ事なり

○重陽の文

菊

八月生て

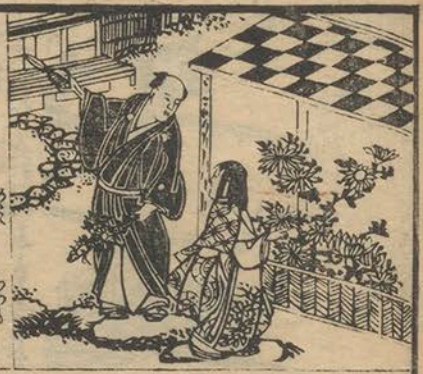
祝ふ中と

中えんの礼もあ紀あるべの
十四日ゆうべ
▲八月 紫月とふ異称お
ふ仕月 木のこふうみぢーく
ろうべ紫あち月ろうこと
墨するとなり
○翌日と八朔とふ文面多の



翌日とろ 秋田のまなこと
さくまで田の実とろこと
ろ紀ろこと八十八付後除外
院の建そ中ろ八朔のる

ひくりまつ誘



月めでたくの祝ひそうもうのたち花かれも人あひて余おほ年ぶかく有ます伊勢両宮御所ともに月かさね月の日を祭のつとめて餅をつきそへ雑煮をこしらへ父母祖父母をはじめ諸親類へ年賀の礼をのべ又家内の男女ともに十月廿日の日俗に今年ほうこ年とて人の

▲九月　七日ごろより後半月ごろまでを略せりと雖我おこなふ九日の事なり○九日をもつて九日の数なるゆへ月も日も九ツおくるなり古今集に菊花の酒とのめばふる年とくらひく老ぬかりとよめる詩歌ともに多くあり

○重陽の祝

日もろともにさしつめて

いつまでもかはらぬ

君をこそ

千代の菊

とは

いのるなり

禁中にも年内の宴そ行ひ古今集に此日の菊花の宴を賜ふ事見えたり

▲十月　初子の日とりこの



跡見学園女子大学短期大学部図書館
a0010166148a





125833





152833

